

『日本読書新聞』一九四九年四月（日本出版協会）

カリキュラム理論の追究

矢口 新

- A** 最近のカリキュラム論議で一番重要なことは何かね。
- B** カリキュラム理論も漸く核心に迫りつつあるといった所だが、まあ、一つは地域性の問題がそうだね。
- A** カリキュラムの地域計画という問題だね。その問題はもうかなり前から論ぜられたようだがね。
- B** うん、それはそうだが、突込み方が次第に本格的になって来たのさ。今迄はそれこそ猫も杓子も地域計画といったものだが、最近それに対する反省が出て来つつあるのだ。これはいい傾向だよ。
- A** どういう反省なんだ。
- B** 例えば文部省の上田事務官が「社会科に於ける地域性の限界」というのを発表している。『社会科教育』という雑誌の第十五号だから君も見たかも知れない。あれは一時流行現象を示しつつあった地域性を無批判に主張する考え方を相当たたいてている。
- A** そうすると地域性にかわって今度はまた中央集権に逆もどりというわけかい。
- B** いや、そう一概には言えないよ。ただ僕の言ったのは、これによって地域性の問題が真剣に考えられるようになったらいいということさ。本質的にはやはり地域計画がこれからのカリキュラムの行くべき道さ。

- A** それでは、地域性に限界ありという考え方は間違いだということかね。
- B** まあ、間違いといえば間違いだし、言葉の問題だといえば言葉の問題だが、これは一寸むずかしい問題だよ。特殊と一般との関係の問題だし、哲学的にいえば弁証法の論理だとも言えるからね。
- A** 上田氏やその他の限界論者は何というのだね。それをまず説明して、それからそれに対する君の意見を聞かしてもらいたい。
- B** その結論はこういう事だよ。地域性の働く場面は材料としての面だけだ。地域性は目標を規定するのではなく、手段たるにとどまるべきだというのだ。何故なら地域の特殊な対象にふれる児童がそこから一般への高まりを実現することが出来ないということになったらこれはおかしい事だ。地域社会が独自の教育目標をかかげるということは危険だ。一般目標—これは一応国家的基準によるものを意味していると考えてよいと上田氏は言っておられるが—を地域ごとに具体化するのが望ましいと、まあこういうわけだ。
- A** うん、そうするとこれは明瞭な教材の郷土化という曾つての郷土教育論だね。
- B** まあそうだ。だがこういう論の出で来るのにも一応理由はあるのだよ。何しろ現在までの地域性の主張というのは、これまた狭隘な郷土主義が多いからね。とくに実践の現場でそれが著しいから、これに危険を感じるのも無理はないね。
- A** そうすると現在、実践の現場ではやはり昔の狭い郷土主義が横行しているというわけか。それではまるで郷土教育理論のむしかえしみたいなものだね。
- B** そうだ。だから、今後は新しい地域主義が生れなければならないのだ。この論議が本格的につつかればそれが明らかになると思うがね。

A 君はその差異はどこにあると言うのだね。

B 僕は地域性の主張というのは、根本的にはカリキュラムの空間的構造を問題にしていることだと思ふのだ。この点を見失うと地域性を主張する側も反対する側も共にピントが外れるわけだね。

A カリキュラムの空間的構造というところ……

B 知識カリキュラムならば、空間性は問題にならないだろう。知識に国境なしさ。所が生活カリキュラムで経験を問題にするとこれは空間性を問題にしなければ成り立たないさ。人間の生活がそれぞれ空間的な構造をもっているからね。そうなれば地域性という事がどうしても主張されるわけさ。

A というのと、どういう事になるのだ。もう少しくわしく話してくれ。

B つまり、カリキュラムの空間的構造を問題にすれば、その構造の核として具体的な生活空間が必要さ。それがいわゆる地域社会だが、この地域社会を空間構造分析の視点としてゆくわけさ。地域社会はそういうものとして出発点だと考えられるわけだね。而もまた帰着点でもあるのだ。そこに於て、さっき考えたように国民の一人一人が国家の手段だという事はないようにね。この場合具体と普遍、特殊と一般は弁証法的な統一的存在なのだ。まあそういうむずかしい事はこれ位にして、ともかく、このように理論は明なのだが、それをカリキュラムに生かす方法の問題とも言えるよ」

A なかなか面白そうな問題だが、そういう事を勉強するのにどんな著書があるのだ。

B 雑誌に書かれたものは随分あるよ。比較的初期のものでは『社会科教育』第三号に「郷土社会と社会科」(矢口新)というのがあるよ。

これは上田氏によって批判の対象となったものの一つだ。同じく『教材研究』という雑誌の去年の四月号の「教材の地域性」というのもそうだ。『教材研究』は十月にも地域社会と教科課程という特集を出し

ているが、これには金子孫市氏が「教育の目標と地域社会の要求」、青木誠四郎氏が「児童の生活と地域社会」というのを書いている。『社会と学校』も去年の四月号に、教育計画という特集を出してこれには海後宗臣氏が「教育の地域社会計画」、石山修平氏が「教育計画の範囲と内容」、梅根悟氏が「生活学校はどこへゆくのか」を書いてこの問題を取扱っている。このうち海後、梅根氏のははっきり上田氏の考え方とは対立しているから考え方を練る上では両者を併せよむといいたろうな。地域性を単に手段とみるのを真向から否定しているよ。

A 単行本としてまとめられたものはあるのかい。

B いや、その問題だけをまとめた考察というのはないようだな。まだそこまで突込んだ研究はない。けれどもカリキュラムに関して言う時は一応これにふれてはいる。一昨年出た中央教育研究所著の『社会科概論』(金子書房)は比較的初期のものだ。最近のものでは海後宗臣氏の『教育の社会基底』(河出書房)、石山修平氏の『民主教育論』など、何れもこの問題に正面から取りこんで、一章を設けているよ。

A この問題は今後大いに研究の余地があるのかね。

B それや、大ありだよ。この問題を根本的に突込むか否かで、カリキュラム構成の方法も成立するのさ。新しい教材の性格もここから検討してかからなければ本物にはならないよ。この辺の考え方が、甘ければ依然として知識主義的な教育内容しか編成することは出来ないよ。実体調査によって教材を構成しようとしても、現在うまくゆかないのは、一つはこの辺の問題について十分な理論的究明がないからだ。カリキュラムの空間的構造をどうつけるかというのは、実体調査で生活の空間的構造をどう把えるかという事だからね。これに対しては、中央教育研究所の機関雑誌の『教育科学研究』に共同研究で「カリキュラム構成のための実態調査」というのを出している。まだ第一報告だからはっきりしないが、一つの実証的研究として意味あるもの

だと思う。

A いや、どうやら地域性の問題のありかがわかったようだ。地域性の問題も結局、知識主義に対する行動主義の問題のようだね。まあこれはその位にして、もう他にカリキュラムの問題で注目すべき事はないかね。

B そうだね。まだいろいろな問題があるといえはあがあるのだが。コア・カリキュラム論などは注目すべきものの一つだろうな。これはまたその理論そのものの出現の仕方が極めて日本的な様相をもっているよ。

A コア・カリキュラムか、そういえば最近たしか去年の暮かに大会などがあって、大分はなやかな論議を展開したそうだが、出現の仕方が日本の様相を示しているというのはどういう事かね。

B ハハハ。それは別にむずかしい事ではないよ。まず第一にそれが表面的なカリキュラムの形態の問題として考えられているということだな。社会科が出現すると同時に、それより進んだ形のものとして、こんなのもあると、何所かのアメリカ学者が紹介したと思ったら、とたんにもうコアでなくてはという事になって、我と思わんものはこれで宣伝を開始したわけだな。コア・カリキュラムの一番槍争いをしかねない勢だよ。それが如何にも日本的だ。自分の方に大して理論的、実践的必然性があるわけではないのだよ。一応まあ表面的な理論はあるがね。というのは、学者の紹介によつてはじまったという事さ。まあ何も社会科の実証的な研究をしなければそこへ進んでいけないというわけではないが、日本の学者でも、日本の新しい教育について地道な研究というのは大してやってはいないからね。アチラのもの紹介が主たるものとなっている。それも悪くないけれども、やっぱり何か地につかないものがあるようだね。コア・カリキュラムの大凡の見当をつけたという所かな。その程度のものとして考えておく必要があるよ。

るよ。

A コア・カリキュラムに対する本格的な研究はあるのかね。

B いやまだ、そういうものは見当らないようだね。最近二、三ヶ月の間に流行した一種のカリキュラムといった感じだな。だからこれは実践の方が先へ行っているとも言えるのだ。あちらこちらで随分いろいろなプランが出ているからね。曰く「新潟第一師プラン」曰く「明石プラン」曰く「北條プラン」曰く何々とね。皆印刷物になっているよ。そう教育計画のようなものが多いわりに理論的な研究はないようだね。最近雑誌でコア・カリキュラム論というのをみるが何れも概論的介绍の域を出ないようだね。

A どんなのがあるの。

B 誠文堂新光社の新雑誌『カリキュラム』という雑誌が取扱っているね。石山修平氏、梅根悟氏、海後勝雄氏などが書いてるようだし、『教育公論』（六月号）に倉沢氏が「コア・カリキュラムの理論」というのを書いてる。併しどれも割合に簡単な理論のようだね。

A どんな考え方だい。

B 簡単にいうと、かつての郷土教育や合科教授の生活題材のようなものをかかぎって、教科を統合するという事のようだね。少くとも今いわれているのはそうさ。そうさ、社会科教育研究社から『コア・カリキュラムの研究』というのが出て、それに、梅根悟氏が「コア・カリキュラムについて」倉沢剛氏が「アメリカに於けるコア・カリキュラムの発展」、海後勝雄氏が「我國に於けるコア・カリキュラムの課題」といいうわば、理論的な紹介風のものを書いて、その後千葉県北條小学校、新潟第一師男子部附属小学校、京都師範女子部附属小学校、兵庫師範女子部附属小学校の実践報告がのっている。これで大凡そ概観出来るね。どれをみても一般的に言えば、教科並列主義をやめて、総合した超教科的な課程を置いて、これを中心としてやる。必要

に応じてその周辺に練習教材を置くという考え方のようだ。これは海根氏もはっきり言っているよ。

A それでは大して新しい問題でもないよだね。

B そうだよ、何も新しい事はないさ、形だけを問題にして居れば新しい事はないよ。

A じゃ何が新しいというのだい。

B そこがそれ、日本的な所で、極めてとっつきやすく、しかも名前は耳新しいから、あっちこちのモデルスクールにモデルのだよ。だが実はそんな所に問題はないのさ。

A ではどこに問題があるのだね。

B それは海根氏も前記の論文で一寸ふれているのだが、誰もそれに注意しないのだ。何を以てコアとするかという事が問題だという、この所が大切なのだよ。

A というとうどういう事だ。

B つまり形はコアでもそれは依然として知識内容の統合にすぎないのさ。しらべようとか、つくろうとか、遊ぼうとか言って、マスクをかぶっているが、それは一皮むけば皆或る知識を与えるための衣にすぎないのだ。きな粉かアンコでくるんだ知識体系さ。そこに問題があるのだよ。それは併し今の日本の教師が、甚しいのになると一ヶ月や半年で作らあげた単元表がそういうものとなったとしても文句は言えないよ。我々の頭は知識体系以外のものは入っていないからね。そうでない生活自体の体系などというものは入っていないからさ。

A では結局コアといっても、大してかわっているわけではないというわけだね。

B まあそうだよ。何を以てコアとするかという事は、これは、コアという形態の問題でなく教育内容の質の問題であり、構造の問題で、

これは、カリキュラムの形態から突込んだのではないつまでたつても解けない事だよ。むしろ生活構造の分析の問題から入って行くべき問題なのだ。日本のコア・カリキュラム理論がそこへ行くのは今年の下半期頃かな。

A そうするとこの問題も生活構造の分析の問題となるわけかね。

B そうだね。カリキュラムの問題は、結局生活構造の分析の問題だといっているよ。或は人間の生活行動の分析といってもいい。結局知識的なもの、観念的なものにかわって、実践的なもの、現実的なものが表へ出て来たのだね。いわば、考えられたものによって、世界を考えないで、世界そのものにぶつかってその類型を見きわめようということだよ。そこから、生徒の生活設計を考えてやる必要があるというわけさ。

A そういう根本的な問題の探求がやはり必要なわけだね。そういうものに対するよい参考書はないのかね。

B やそういうものが全くすくないのだよ。併したとえば、梅根悟氏の『生活学校の理論』（国立書院）、海後宗臣氏の『教育編成論』（国立書院）、それからさつき言った『教育の社会基底』（河出書房）、などはいい参考書になるよ。それからキルパトリックの『デモクラシーへの教育』というのが、西本三十二氏によって『新教育の創造』（牧書房）という題で訳されている。これなんかも、教育を或は学習を根本的に考え直すにはよいものだ。

A いやどうもありがとう。今日はこれ位で失礼しよう。

（筆者は中央教育研究所員）